

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第6回 粋な「見立て」の美学
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-04-11
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6233

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

第6回

た紙に注目してほしい。そこには「書き流し」と呼ばれる狂歌が書かれ、作品に必ず添える習わしがある。

作のルールなど共通点が多いが、呼び名の他にも違いが見られる。作品の背後に貼られる「書き流し」は「お社(やしろ)に二礼二拍手心(こころ)締め 国家安泰神

馬奉納」と読めるが、この歌には「謎かけ」がある。作品のテーマの「神馬」と、作品に用いた「注連縄(しめなわ)」「案(神事に用いる机)」「台(三方)の三つの神具が詠み込まれているのが、お分かりになるだろうか。

この狂歌と作品を作ったのは上袋田区の丸屋仁志氏。「作り物」の名手として知られる方である。歌と道具の絶妙な組み合わせ。これこそが勝山の「作り物の醍醐味である。

なぜ「作り物」には狂歌がよく合うのだろうか。それは狂歌の言葉の「見立て」も、作品の道具の形の「見立て」も、同趣の遊び心に起因するからであろう。

事実、前回紹介した「造物趣向種(つくりものしゅこ)うのたね)には、狂歌を添えた版もあり、江戸時代に大流行した狂歌と「一式飾り」との関連性が指摘されている。

私は現在、1755年に江戸で出版された「見立百化鳥」という絵本に注目している。この本は「造物趣向種

の先駆けとされ、大工道具など身近な道具一式を、即興的に鳥と木に見立てた作品の絵が描かれて、道具をもじった説明文が添えられている。後に出版された続編では絵に狂歌が添えられ、ここでも狂歌との深いかかわりが窺える。

勝山の「作り物」に「書き流し」を添えるスタイルは、江戸時代から続くとは言えないが、そこに「一式飾り」の原型を見る思いがする。

また、勝山では丸屋氏の制作を何度も拝見しているが、いつも祭り前後の1時間ほどで、作品が見事に仕上がる。勝山の「作り物」は、「わか」の精神にのっとり即興的に飾ることを旨とするのである。

わずかな数の道具だけでシンプルに飾られた作品には、狂歌とよく似た粋な「見立て」の美学が息づいている。

一見すると子どもの無邪気な遊びのように見える「作り物」や「一式飾り」は、しゃれっ気やユーモアを醸しむ、粋でクールな大人の遊びと言えるのではないだろうか。

まずは写真をご覧いただきたい。馬の親子が飾られている。馬の顔には三方と呼ばれる木製の台を用い、台の丸い穴をそのまま目に見立てている。鳥取の「法勝寺一式飾り」をほつぷりとさせるシンプルな作品だが、実は山陰のものではない。

これは、2014年2月に福井県勝山市の「勝山左義長祭り」で飾られた作品で、神事に使う道具一式を用いて制作されている。前回、江戸時代に庶民の間で「見立て遊び」が流行したことに触れたが、それは山陰のみならず北陸にも伝わり、勝山にしっかりと根を下ろしている。ただし、勝山では「一式飾り」とは呼ばずに「作り物」と呼ぶ。勝山の「作り物」と山陰の「一式飾り」を比べると、制

粋な「見立て」の美学

